

西村繁樹 陸自69 著

『三島由紀夫と最後に 会った青年将校』を読んで

中川 義章 陸自78



本書は、偕行社安全保障委員会研究

員（戦略論）でもある西村繁樹会員の最新作です。これまで防衛戦略または戦略論の著作が多い著者の戦略研究の発端ともなる、三島由紀夫との面談・交流を主軸として、三島由紀夫が市ヶ谷自衛隊での割腹自決をしてまで訴えたかったことを明らかにすること、その時の三島由紀夫の青年将校に対する問いに答えることを主題としています。50年以上前の記憶とメモを、三島由紀夫の著作、当時の自衛官の知人へのインタビュー、三島研究者「盾の会」関係者との意見交換と、これまでの三島由紀夫に関する研究書を照らし合わせて、事実を掘り起こし、分析し、ま

とめた内容です。

西村繁樹氏は、市ヶ谷自衛隊での事件を含む激動の1960年代末の68年から70年は、防大4年生から3尉時代という「白面の青年将校」でした。その青年将校が、当時既にノーベル文学賞候補として知られていた昭和の文豪である三島由紀夫と、どのようにして、知り合って交流したのかという大変興味を覚える事実が明らかにされています。今となっては、体験のない世代には説明が難しい学園紛争、全共闘運動、70年安保闘争から過激化して、連合赤軍事件につながる一連の社会的な動きの中の、自衛官・自衛隊の断面を描いたものともなっています。

通説では、70年11月に、ポデイービルや自衛隊体験入隊などの奇矯な行動が話題となっていた作家の三島由紀夫は、仲間を引き連れて、市ヶ谷駐屯地を訪問し、ついには東部方面総監を人質にして、バルコニーから、集まった自衛隊員にクーデターを呼びかけ、ヤジの嵐の中、「ことはならない」と悟り自決した、ということになるのでしょうか。

仲間というのが「盾の会」という団体で、自決のやり方が、諸外国のマスコミが衝撃を受けてハラキリと報道した割腹自決であったということを、知っている人は少ないものと思われま

そこに至る直前といつて良い約2年
余の経緯について、最年少の自衛官関
係者が、自身の記憶を呼び起こしてま
とめた証言でもあります。三島由紀夫
が、「文壇に多くの敵を作り、」と述べ
ていたということですが、三島由紀夫
の国防に関する活動は、憲法草案を研
究するなど政治的なもので、経済界に
も協力を求めるほど幅広くまた精神的
に行われており、多くの自衛官あるい
は元自衛官が関与していた実情が明ら
かにされています。通説にあるような
「文士の遊び」ではなかったことは明
らかです。クーデターの呼びかけとい
う穏やかでない話であり、これまであ
まり自衛隊の外側には出ていない事実
にも触れられています。三島由紀夫の
社会的な影響力の大きさと、当時のお
おらかだった自衛隊の実情が描かれて
います。

防衛などに取り組んでおられるでしょ
う。本書によれば、三島由紀夫は、自
衛官・自衛隊の対応に絶望して割腹自
決したということですが、短気を起こ
さずに「日本文化の再生」を自らの宿
命と感じて「生涯を懸ける仕事」とし
て国民運動組織を作って頂ければ、そ
の後の自衛隊を巡る政治・社会環境も
大きく変化したのではないかと思われ
ます。栗栖統幕議長の超法規発言事件、
湾岸戦争後の国連PKO派遣をめぐる
論争、有事法制に関する論争、イラク
派遣時の論争や近くは平和安全法制を
巡る集団的自衛権論争など、自衛隊の
位置づけ、すなわち、国体と建軍の本
義に関する憲法問題の起きるたびに、
本質を決る発言をされるお姿を拝見で
きたと思われれます。また、冷戦後のハ
ンチントン・ハーバード大学教授の「文
明の衝突」に描かれる「文化圏の衝突」
について対談など行われれば、大変世
の中を覚醒させるものとなったと思わ
れます。

この本の大きな特徴は、単なる秘話
を暴露するというものではなく、昭和
の志士あるいは国士として、三島由紀
夫がなぜクーデターを考えるようにな
ったのかという根本問題について、
国体と建軍の本義の確立という憲法改
正問題があることを明らかにしている
ことです。その主張を、平易な言葉で
青年将校に、三島由紀夫本人が語って
いる内容が記録されています。そのこ
とが、一人の新品3尉に影響して、戦
略研究の道に進むことになり、50年を
経て、戦略家として、当時の三島由紀
夫へ回答をする内容になります。

2019年の今、総理大臣でもある
安倍自由民主党総裁が、先頭に立って
憲法改正、特に自衛隊の憲法への明記
を提案する時代となっています。この
時に、三島由紀夫が健在であれば、ど
のような意見を述べられたでしょう
か。そのことに、どのような反響があっ
たでしょうか。

健在であれば、今年正月に94歳、お
そらくノーベル文学賞・文化勲章受賞
者ということになります。自ら中心と
なった国民運動組織の長として、民間
に戦慄した左翼思想家・運動家が、毀
誉褒貶はなほだしい通説の流布によつ
て、事実を隠蔽し、三島由紀夫の考え
が世の中に広がることを妨げたのだと
思えます。本書は、その意味で、通説
の欺瞞の暴露本です。

憲法改正などに関心のある自衛官O
Bは、是非一読されて、国民一般を啓
蒙する一助にすることを薦めしま
す。現役自衛官を含む若い方々には、
「こんな次元の問題があるのか」「こ
んな問題の切り取り方があるのだ」
「こんな自由な時代もやり方もあった
のか」「もしかしたら、今でもやれる
ことはないのか」「今はやる気
がないだけでないだろうか」とか、あ
なたが知らない世界への招待状であ
り、発想の転換の契機になります。会
員皆様に一読を奨める次第です。

並木書房 2019年10月
価格 1600円+税

青年将校に、三島由紀夫本人が語って
いる内容が記録されています。そのこ
とが、一人の新品3尉に影響して、戦
略研究の道に進むことになり、50年を
経て、戦略家として、当時の三島由紀
夫へ回答をする内容になります。

本書は、三島由紀夫の考えたことを、
青年将校に平易に語った内容を、その
発言の状況を含めて、わかりやすく伝
える書となっています。作家という仕
事柄なのか、難しいことを相手と状況
に合わせて伝えられるグレート・コ
ミュニケーターであった三島由紀夫
が、多くの敵を作ったのは、そのこと
にここに謹んでお悔やみ申し上げます。
すとともに哀悼の意を表します。

編集委・著者の西村繁樹氏は本書の
出版直後の11月12日に急逝されまし
た。